



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ 白駒妃登美

生み育むという生き方

幕末志士の母・野村望東尼 のむらぼうとうに ②

✿ 武家の名門に生まれながら

前回、野村望東尼が背中を押したことで、高杉晋作が倒幕へ奮起し、歴史を大きく回天させたことをご紹介しました。

これは私の仮説なのですが、多くの幕末志士を導いた吉田松陰は、晋作の才能を誰よりも認めながらも、内心は彼にはあまり期待していなかったのではないのでしょうか。というのも、高杉家は武家の名門でしたから、幕藩体制を否定する「倒幕」に本気になることは難しいだろう……松陰はそう思っていたのではないかと私は思っています。事実、幕末志士のほとんどは、下級武士の出身でした。その中で晋作の存在そのものが一つの奇跡ですし、同時に、師匠からあまり期待されていなかったであろう晋作が、師の志を最も色濃く受け継いだところに、私は歴史の機微を感じ、深い感銘を受ける

のです。そんな維新を牽引した晋作を包み込み、心に火をつけた望東尼という女性について、今回はその慈母のような一面が表れる歴史物語をご紹介します。

✿ 寮母さんののように

望東尼に励まされた晋作は、拳兵を決断した際、ある誓いを立てます。それは「金輪際、困ったという言葉は吐かない」というもの。実際、彼は八十数人の手勢で長州藩の正規軍約二千人を相手にした時も、幕府十万の軍に挑んだ時も、困ったという言葉は吐かずにより切りました。ところが、本当はその後に一度だけ、困ったと言ってしまう場面があるんです。それは、地元萩に残してきた奥さんと、倒幕運動の拠点・下関しもせきにいる恋人が鉢合わ

野村望東尼 (1806-1867)

幕末の歌人であり勤皇家。福岡藩士の夫と共に和歌と国学を学ぶ。夫と死別後は若い志士を多く助けた。現在の福岡市中央区に史跡(晩年の住居)がある。

【イメージイラスト】アオジマイコ